

「土砂災害対策について考える」

栃木県 栃木市立栃木西中学校 3年 釣井 柚希

2019年10月12日、私は夕ご飯を家族と食べていた。朝から降っていた雨は夜になってもやまなかった。テレビでは栃木市に大雨洪水警報が出ており、近くにある永野川の土流が決壊したという情報がインターネットで確認できた。父は玄関に出て外の様子を見に行ったら慌てて帰ってきて、「道が川になっている。」と言った。窓から外を見ると見たこともないような光景が広がっていた。私は「家のなかに浸水しませんように」と祈った。しかしその願いも届かず、あっという間に家の中に水が入ってきた。母から「2階へ上がるように。」と言われ、弟と一緒に2階に上がった。家の中はすぐに停電して真っ暗になった。父と母と姉はスマホのライトで照らしながら出来るかぎりの荷物を2階に上げていた。私もそれを手伝ったが、多くの荷物は水没した。不幸中の幸いで雨はやみ、家が流されることはなかった。これは私が経験した台風19号による床上浸水の経験だ。

しかし土砂災害はそうはいかない。土砂災害は前触れもなく発生してしまい、発生したらそれは多くの場合、被害は大きくなってしまふからだ。逃げる時間もなく、最悪の場合死者が出てしまふかもしれない。

日本では土砂災害が多く発生している。日本列島の地形や地質・気象などの自然条件に大きな原因があるからだ。また日本は山地が多く（国土の約6割）平地がせまいため、山の斜面や谷の出口など、土砂災害の起こりやすい場所にもたくさんの人が住んでいて、それも土砂災害で大きな被害が出る原因となる。

国土交通省の「21世紀の土砂災害対策を考える懇談会」で6つの課題を挙げている。

1つ目は、公共事業を取り巻く今後の課題として、予算の効率的、効果的な投資を挙げている。土砂災害リスクが高い場所を調査することでハザードマップを充実させることができる。リスクの高い順番に投資をしていくといいと思う。また、監視カメラやAIなどの技術を活用して、土砂崩れのリスクを予想することで危険度の高い地域を閉鎖するなどの対策を進めるべきだと思う。

2つ目は、高齢化社会を取り巻く今後の課題として、災害弱者の支援について挙げている。近所の住民と助け合うことが必要であると思う。私は2019年の台風19号で床上浸水を経験した。どうしようもない状況になった時に、近所のおじさんが水没した家具などの片付けを手伝ってくれた。自分も被災しているにもかかわらず、人に親切にできることに感動した。この経験が無ければ、横のつながりの大切さを知らなかったかもしれない。

3つ目は、都市と地方を取り巻く今後の課題として都市化・市街化の進展について挙げる。土砂災害には自然災害や、急激な都市化の影響によるものがある。都市化によって無理な斜面の土地利用等のリスクがある。熱海の土砂災害も何人もの死者が出たとニュースで耳にした。その原因は違法な盛り土だった。法律や条例による規制等で無理に土地開発をさせないことが必要だと考える。

4つ目に環境を取り巻く今後の課題として里山の再生がある。都市の開発が進み、産業廃棄物の不法投棄や土砂採取等の問題である。国有地だけでなく、私有地も多く管理が行き届いていないと聞く。災害のリスクがある所は、国有地にして里山化の取り組みを進める必要がある。

5つ目の社会を取り巻く今後の課題では地方の過疎化が進んでいる。しかも人が全くいなくなるのではなく一部の人々は住み続けている。一人でも住んでいればインフラのコストはかかる。先祖の代からの土地や家屋が土砂災害リスクがあるからといって、立ち退いてもらえるかは繊細な問題だ。ただ私の意見は、少子化による人口減が大きい日本では、ポツンとあるような家は離れてリスクの低い土地に街づくりをして住むべきだと思う。そのために住居を移動してもらう人に対しての移住制度も併せて取り組むのだ。

令和6年度 「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞（事務次官賞）

6つ目に国民生活を取り巻く今後の課題として公共事業への住民参加についてがある。住民の希望を聞き取り、実現していくことが重要だ。河川の護岸工事などのハード面は国や自治体が責任をもって取り組む必要があり、ソフト面については住民のネットワークを強化させることで、意見の集約から万が一の時の助け合いまでも進めることが出来る。

以上の取り組みを行うことで、私たちは美しく災害に強い日本に住み続けられることに繋がる。私は自分が災害に遭ったことで、日頃考えていないことはいざその時になっても行動に移すことが出来ないことに気づくことができた。一個人としては普段から近所づきあいを大切にしたり、行動する範囲の危険箇所等を確認したりして災害のリスク感度を上げていきたいと思う。